FROM United Kingdom

中野香織

❹湯たんぽが夢見る異国美女

カタロニアで映画づくしの齊藤敦子さま。

ヴェネチアから帰国して二週間かそこらなのに、今度はカタロニア映画祭で審査員とは、ほんとに体力勝負のお仕事ですね。

ところでカタロニアってどこですか？世界地理に思いきり疎い私は「大辞林」を頼り、「スペイン北東部地方、中心都市バルセロナ」ということをようやく知りました。

いや、お恥ずかし。無知の罪滅ぼしの意味もこめて、カタロニア出身の有名人を調べてみたら、なんと、大物芸術家を輩出しているんですね。サルバドール・ダリにパブロ・ピカソ、ジョアン・ミロにアントニオ・ガウディ……。ピカソの場合は正確にはバルセロナでの生活が彼の方向を決定したという意味での強引な「出身」ですが。

ピカソの肖像を見ていたら前回の敦子さんのご指摘「セックス・アピールは醜男醜女に限る？」を思い出しました。愛人をとっかえひっかえしたピカソもまた「美男ではないけどセックス・アピールがある男」に見えたもので。ココ・シャネルもピカソに惹かれて誘惑しようとしたらしいし（結局お友達どまりだったみたいけど）。

それにしても、美しくない男女二人だけで「性欲」を描くっていう「金曜の夜」。フランスだからこそ撮れる映画ですね。日本での上映をあまりあてにできそうにないので、ヴァンサン・ランドンとヴァレリー・ルメルシエのからみを無理やり想像しながらふと思ったんですが、性的魅力と性欲を発生させるチカラってまた別物かも。どちらも「醜」をスパイスにすることはあっても、モーリス・シュヴァリエやピカソの性的魅力が第三者にも通用する開放系の「醜美」であるのに対し、性欲（のみ）を発生させるチカラのほうは、第三者には理解不能なのに特殊な状況下で有無を言わせず働いてしまう閉鎖系の「醜力」というか。

なんのこっちゃ。ごめん。それはともかくフランス映画は「関係」のバリエーションが豊か。フィリップ・リオレの「マドモワゼル」みたく、24時間だけの婚外恋愛っていうありがちな話でも、新鮮で無二の関係のように見せてしまう繊細さもあるし。イギリスの監督は、たとえばセクシーな異国美女が退屈な日常から連れ出してくれる……という男の夢を撮るのがうまかったりはしますけどね。「バースデイ・ガール」のジェズ・バターワースのことですが、やはり「ヨーロッパ大陸の人々は性生活をもっている。イギリス人は湯たんぽをもっている」（ジョージ・ミケシュ）という生活の違いが芸術の違いとなって表れているんでしょうか。

「バースデイ・ガール」のニコール・キッドマン

ドーバー越えて

齊藤敦子
中野香織

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齊藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齊藤さんは、以来10数年、友情を育む。イギリス文化にフランス映画。専門分野をベースに交わされる映画話メールの面白さに眼をつけたキネ旬編集部により、連載として誌面展開されることに。

カット・井上陽子